

5. 『太平記』の〈乗り物〉

大学史料館では、常設展「ヒトと乗りもの」を開催いたしますので、今回はそれに因んだ話題を提供しましょう。文学テキストにみる「乗り物」の問題です。例えば、南北朝の動乱を語る『太平記』という軍記物語がありますが、それは後醍醐帝の内裏からの逃走劇で始まります。帝は「女房車」で出奔、^{はりごし}「張輿」に乗換えて笠置山入りし、さらに山からは「田夫野人」の姿で「裸足」で逃走。六波羅に捕まるも、今度は帝に相応しい待遇として^{ほうれん}「鳳輦」^{こんりょう ぎょい}「袞龍の御衣」を幕府に要求。隠岐島脱出の際も、「女輿」に便乗し、そして「泥土」のうえを「裸足」で疾駆、さらに野人に背負われ、「船底」に隠れたりして伯耆国船上山にたどりつく。吉野入りではまたも「女装」、そして「馬」、さらに「張輿」……。

『太平記』の行文は、このように後醍醐が移動するごとに、その衣装や乗りもののチェンジの有り様に執拗に拘り続けます。内裏の奥深く鎮座する、不可視にして不動の天皇像とは正反対のものがここにあります。ここでは白日のもとに曝された天皇の身体こそが問題とされていますが、それは逃げ惑う敗者としての姿ではなく、異様な力を秘めた異形なるものとして位置づけられています。まず「衣装」とともに「乗り物」が天皇の身体を象るモチーフとしてある点に注意しましょう。そしてもう一つは、その凄まじいばかりの変幻自在な有り様です。このように縦横無尽に変身する後醍醐の身体により、一挙に社会全体が革命の混乱状況にたちいたったとするのが『太平記』の方法であります。因みに、後醍醐の逃走と向き合うように、北朝光厳院の全国行脚の場面を最後にすえて『太平記』は語りおさめられています。「乗りもの」、それは「交通論」「逃亡論」「身体論」「変身論」「変装論」「祝祭論」「天皇論」等への可能性を秘めた、今もっとも注目されている研究対象なのであります。

(館長 神田龍身)



鳳輦(『故実叢書 輿車圖考付圖 甲帖』(1900年発行)より転載)

6. 催し物のお知らせ

第54回 史料館講座 「歌舞伎の世界 — 伝統と創造 —」

講師：京都造形芸術大学教授 田口章子氏
日時：11月15日(木) 18:30~20:00
会場：学習院創立百周年記念会館1階正堂

* 入場無料・事前申し込み不要です

ミュージアム・レター第5号

2007年9月15日発行

〒171-8588

東京都豊島区目白1-5-1

電話 03 (3986) 0221

内線 6569

FAX 03 (5992) 9219

Gakushuin University Museum of History

学習院大学史料館

● ホームページもご覧ください

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua>